

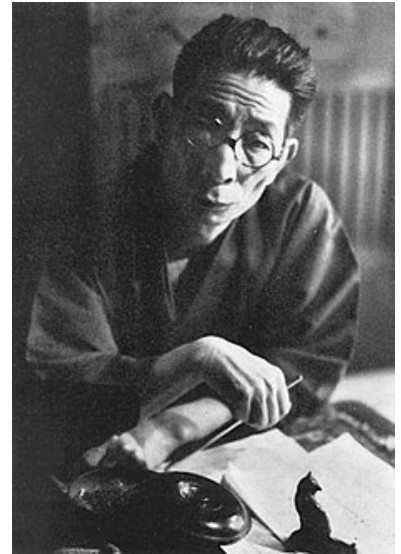
## 名言・格言

「朝を愛す」 室生犀星

僕は朝を愛す  
日のひかり満ち互る朝を愛す  
朝は気持が張り詰め  
感じが鋭どく  
何物かを嗅ぎ出す新しさに餓えてゐる  
朝ほど濁らない自分を見ることがない、  
朝は生まれ立ての自分を遠くに感じさせる

朝は素直に物が感じられ  
頭はハツキリと無限に広がつてゐる  
木立を透く冬の透明さに似てゐる。  
昂奮さへも静かさを持つて迫つて来るのだ。  
朝の間によい仕事をたぐりよせ、  
その仕事の精髓を掴み出す快適さを感じる。

自分は朝の机の前に坐り、  
暫らく静かさを身にかんじるため  
動かずじつとしてゐる。  
じつとしてゐる間に朝のよい要素が自分を囲ひ。  
自然のよい作用が精神発露となる迄、  
自分は動かず多くの玲瓏たるものに烈しく打たれてゐる。



**室生犀星** むろう-さいせい：1889－1962年 大正・昭和時代の詩人、小説家。

明治22年8月1日生まれ。逆境の幼少期をへて詩人をこころぎす。大正2年北原白秋の主宰誌に「小景異情」を投稿し、生涯の友萩原朔太郎と知りあった。7年「抒情小曲集」を刊行。30歳代から小説に転じ、「あにいもうと」、「杏つ子」(昭和33年読売文学賞)、「かげろふの日記遺文」(34年野間文芸賞)などの代表作がある。芸術院会員。昭和37年3月26日死去。72歳。石川県出身。本名は照道。作品はほかに「我が愛する詩人の伝記」など。

室生犀星記念館

<https://www.kanazawa-museum.jp/saisei/>